

遠江・山と里の民俗

会報 第27号

「川合花の舞」が描かれた電車が走行

（遠州鉄道鉄道路線（愛称赤電））

天竜区佐久間町の県指定無形民俗文化財の「川合花の舞」を車両に描いたラッピング電車が、今年の三月末から遠州鉄道鉄道路線を走っています。この電車は、電源開発株式会社（以下「Jパワー」）所有の佐久間ダム・発電所の運転開始七十周年および同発電所の大規模更新工事である「NEXUS佐久間プロジェクト」の本格着工という大きな節目を記念し、遠州鉄道株式会社の協力のもと、天竜川水系・北遠地域をテーマとして運行を開始したものです。

このJパワーの企画は、佐久間の歴史を振り返るとともに、次の世代へ繋いでいく未来への思いを形にすることを目的として、Jパワー中部支店、佐久間電力所、NEXUS佐久間建設所を中心に約一年にわたり検討・準備がされました。そして、この思いを描くラッピング電車のデザインを、浜松市にある静岡文化芸術

大学の五人の学生グループが描きました。

デザインには、佐久間ダムをはじめとする天竜川水系の水力発電設備が、地域の風景の一部として自然や文化と調和して存在している姿が描かれています。あわせて、佐久間町の県指定民俗文化財「川合花の舞」や郷土芸能「竜神の舞」など、天竜川流域が育んできた文化や魅力も表現され、地域への誇りと親しみを感ぜさせてくれます。「川合花の舞」は榊鬼と湯ばやしの舞が乗降口に描かれ、市民の皆さんに佐久間の伝統芸能を印象付けています。

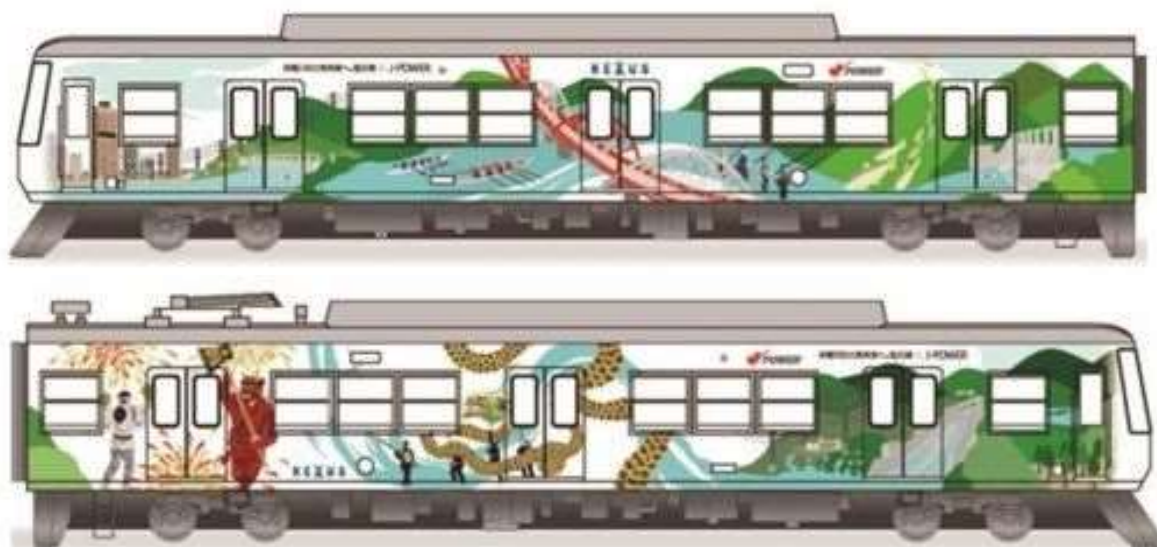
このラッピング電車は約一年間運行され、日々の沿線風景の中で多くの市民の皆さんの目に触れることで、水資源や電力、祭りなどの伝統文化といった天竜川の恩恵や役割について理解が深まることが期待されています。



「川合花の舞」は、毎年10月に行われる湯立て神事



「榊鬼と湯ばやしの舞」の絵



ラッピング電車のデザイン画 <資料提供：【J-POWER 電源開発(株)】ホームページより>

民俗芸能に携わる現役世代たちの活躍・そして想い

寺野のひよんどり
オリジナルグッズ製作 インタビュー

浜松市浜名区引佐町渋川に伝わる国指定無形民俗文化財「寺野のひよんどり」は毎年一月三日に行われます。保存会のグッズ開発メンバー(今田英明さん・松本文宏さん)に製作秘話を伺いました



←根付

今田英明さん(左)と松本文宏さん→
幼少の頃から寺野のひよんどりを
見ていたお二人。現在は舞や笛などを担う。

■販売したグッズを教えてください

鬼面の根付三種類(太郎、次郎、三郎)、キーホルダー、クリアファイル、ポストカードです。一番人気は太郎の根付でした。

■3Dプリンターでお面の形を計測されたと伺いました。こだわった点やオススメポイントはありますか

鬼が一点一点違います。口を開けている、閉じているとか、左右の違いがあり、表情が違います。通常であればじろじろ見るのができない鬼を手元でじっくり見ることが出来ます。

鼻先やほほの盛り上がったところはボコボコしていて、グッズに忠実に再現されています。このボコボコは、火の使用による損傷もあるのです。逆に、お面が三百年以上使用できる当時のハイテクで作られていたこともわかります。

■難しかったところは

最初は練習用のお面で試作しましたが、漆が光ると色が抜けてしまっていて、うまくいきませんでした。光の当て方を工夫して、試行錯誤して、今の形になりました。

■昨年からグッズの制作と販売を始めたと伺いました。発案のきっかけや、開発の経緯を教えてください。

2021年、2022年の正月は、コロナの影響で舞をやりませんでした。道具の手入れのために公民館にお面などを並べる中で、皆で何かやりたね、と話し、子どもや保護者を対象に、道具やDVDを見る催しにしました。その活動の延長で、3Dプリンターを使って本物の道具で何かできないか、ということになり、2024年は鬼をかたどった置物をディスプレイし、2025年からグッズの販売を始めました。会長たちが本物のお面を使うことを了承し、全面的に任せてくれました。

■これらのお面は、普段どのように保管されているのでしょうか

木の箱に入れてしっかりと保管されています。計測の時はさすがに緊張しました。



お面の3D計測

■寺野のひよんどりの自慢したい点や今後の展望など教えてください

寺野の中でひよんどりを継続できているところがすごいと思います。人が減っている中で、なんだかんと言っても、小さい頃見てきたものと変わらぬものが実施できています。今回のグッズも、業者に委託すればできるかもしれませんが、ひよんどりをわかっているメンバーでこのクオリティが実現できたのがすごいし、価値があると思います。今後も、できることから何か考えていきたいです。浜松には懐山のおくないや川名のひよんどりもあり、それぞれが独立していると同時につながりがあります。合わせると見えてくるものもあると思います。



↑クリアファイル

↑キーホルダー

寄稿

西浦田楽への想い
守屋主税^{ちから}

浜松市天竜区水窪町西浦に伝わる国指定無形民俗文化財「西浦田楽」で、能頭(のうがしら)を務める家の長男として祭りに携わっている、守屋主税さんが西浦田楽への想いを寄稿くださいました。

私は、国の無形民俗文化財「西浦田楽」の後継者の一人として西浦田楽に携わっています。西浦田楽は、先祖代々、世襲制で各家に伝わる舞を継承してきました。私の家は能頭という役職を務めており、家に伝わる舞も数多くあります。普段は西浦の地を離れ浜北に家を建て、勤めに出ています。初めて能に立ったのは十八歳の時です。それから二十九年間、毎年お祭りの日には帰省しお祭りに参加しています。

す。歴史ある民俗芸能を後世に伝えなければならぬという使命感や責任感を感じたことはありません。好きだから、楽しいからお祭りに参加する。ただそれだけです。

松明の明かり、あかし(松の根っこ)が燃えるにおい、優しい月の明かり、囲炉裏を囲みながら西浦の方言で交わす何気ない会話。物心ついた時から、毎年感じてきたものが自分の中に生き続けています。時代が変わり、年齢とともに自分を取り巻く環境も大きく変わっています。ただ、年に一度、旧暦一月十八日夜、所能の観音堂で奉納される「西浦田楽」には確かに変わらないものがそこにあります。「西浦田楽」には自分の原点のようなものがある気がします。年に一度、自分の原点に戻る日、それが「西浦田楽」です。



寄稿

「民俗芸能の宝庫」
次の二十年、その先に向けて
浜松市文化財課 課長 前野隆典

このたびは、寄稿の機会をいただきありがとうございます。

私事ではございますが、合併の直後、二〇〇六年に当時の生涯学習推進課に配属され、四年間文化財保護行政を経験しました。当時、無形民俗文化財について、今を生きる人が直接関わる文化財として他と異なる特別なものであることを知り、実際に現地に赴き祭礼等を目の当たりにする機会も得て、新しい浜松市が「民俗芸能の宝庫」になったと実感したことが思い出されます。

時は流れ、新型コロナウイルス感染症など、無形民俗文化財の保存・継承のみならず、社会全体に大きな影響を与える困難な状況も経験して迎える今、再び担当をさせていただくことになり、ますます感じていたことは、二〇一二年に設立された「浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会」の皆様の活

動には、大変多くの苦労があっただろうということですね。様々な困難を乗り越え、地域の歴史と文化を守っていくという皆様の尽力なくしては、地域の心そのものとも言える貴重な文化財を次の世代へ継承することは不可能であると考えます。改めて深く敬意を表します。

「民俗芸能の宝庫」である本市の無形民俗文化財が、次の二十年、またその先へと、輝きを失わず、末永く地域に根付き、市民の誇りとなることを心より願っております。皆様との連携をさらに深め、文化の継承という重要な使命を共に果たしていきたいと考えております。引き続き、ご指導、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。



浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会 総会の様子

おきじんじやたうたさい 息神社田遊祭

存続の危機から未来へ

息神社田遊祭保存会 藤田 八朗

一 息神社田遊祭の現状

令和の時代に入り「宮座（保存会）だけで、運営するのは難しい」「高齢化が進み、田遊祭への参加は難しい」「子どもに継承できないので、宮座を退会したい」など、六十代以上の世代から将来を不安視する意見が聞かれるようになりました。

しかし、稚児として参加する若い世代（小学生やその保護者）は、「地域に長い歴史がある伝統行事が残っていることを誇りに思う。」「自分の姓が、六名の一つであることに心が動かされた。」など、伝統行事に価値を見いだしています。これこそ危機を脱するための鍵となるのではないかと考えました。

二 息神社田遊祭の価値とは

練習会に参加した稚児の感想の中にその答えを見つけ出しました。

◆我が家は、「〇〇姓」なので宮座の六名に含まれていたことが感慨深いです。

【理解と誇り】

◆厳かな雰囲気の中、お稚児さんの役を頑張り、とても良い経験になりました。

【子どもの体験】

◆地域の伝統行事に参加して、より雄踏を知って、好きになってももらえたいと思います。

いろいろな世代の方々と関わることができ、貴重な機会でした。【地域を学ぶ機会】

三 宮座総会で未来像を協議

令和三年度と六年度に総会を行いました。

一回目の総会は、宮座（保存会会員）の急激な減少に歯止めをかけることが目的でした。その結果、息神社田遊祭の危機を理解し、159軒から112軒に減少した宮座数に歯止めをかけることができました。（資料1参照）

二回目は、新会長選任のため規約に則り、総会を開催しました。併せて「田遊祭の未来像」これからの事業計画（会計報告含む）を協議しました。「詞章集の再版」「失われた所作の復活」「笛の後継者育成」「他団体との連携」などが承認されました。これらの内容を書面で全宮座会員に配付することで田遊祭に対する理解が進んだと推察されます。その結果、練習会・見学会への参

加人数が増えています。参加者の年代は、六十五歳以下が増え七十・八十代から次世代に静かに継承されている傾向にあると考えられます。（資料2参照）

四 文化財「活性化のメソッド」

◆保団連・文化財課に相談し、課題を明確にすること

◆次世代継承は、親から子への時代から、保存会から情報発信を

◆記録を残し、多くの人に文化財の価値を理解してもらうこと

◆子どもと保護者が体験したいと思う内容にすること

保存会は、危機を乗り越えるために以上の様に取り組んでいます。その中で得た「活性化のメソッド（方法）」が参考になれば幸いです。



練習会・体験会には、稚児と保護者が参加し、田遊祭を理解していただくような場を設けています。（浜松市文化財課作製 DVD 視聴など）

R6-R7練習会・体験会参加者数の比較 資料2



宮座（保存会）世帯数の変化 資料1

